

私たちの 風の松原物語

—語りつぐ

能代海岸砂防林の近代—

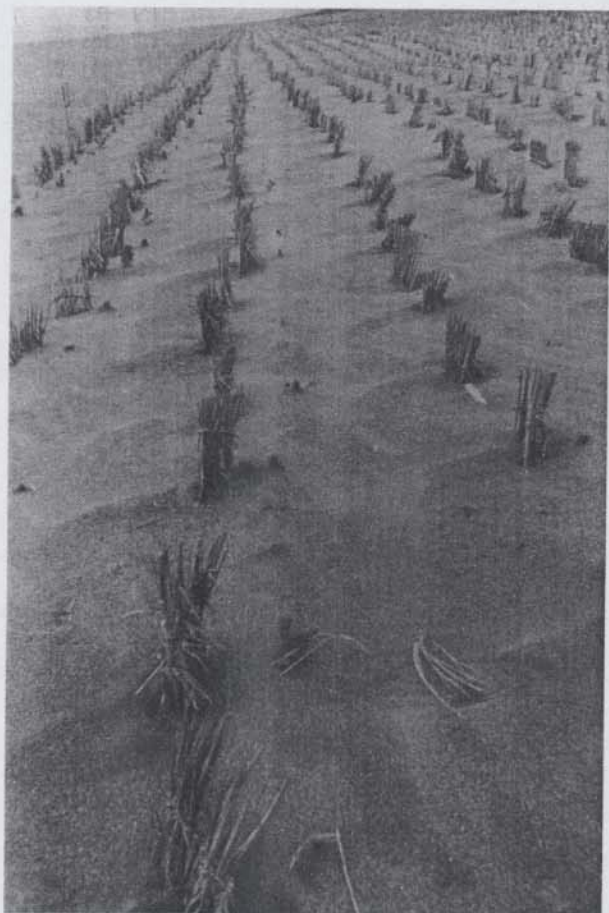
浅野ミヤ



AG

私たちの風の松原物語

—— 語りつぐ能代海岸砂防林の近代 ——



目

次

明治の頃の砂防林

飛砂のため引越した	3
松林はきのこの宝庫であった	4

戦前の後谷地と富樫兼治郎氏の業績

砂防林を荒らす原因は？	7
ノイローゼになった富樫さん	9
仕事にきびしい人であった	10
一番面白かった時代	13
富樫式植栽法をあみだす	15

戦中から戦後の後谷地国有林

戦争中の山火事	19
戦争と松林	21
戦後の復工	23
昼休みにダンス	25
高校時代にアルバイト	26
マツクイムシ調査に三年間無休	28
女性として現場で働く	31
亡き父母と私にとっての松林	33
あとがき	33

明治の頃の砂防林

飛砂のため引越した

明治時代、今の後谷地国有林や能代浜はどんな様子だったのだろうか。

いくつかのきっかけがあつて、近代の能代の松林の変化を調べてみようと思ひ立つたのは、今から七年前の正月であつた。まず市の図書館を訪ね、郷土史関係の図書を探した。

漁港としての能代浜の賑わいを記したものはそれなりにあるのに、砂防林にふれたものは極端に少ない。特に明治維新の頃の松林の様子を知りたくて地図や絵を探したが、人が住んでいない所というのは地図の上でも表れてこない場合が多いようで、まだ見つけることができない。維新から数えてはや百三十年、明治も終る頃に松林の近くに住んでいたという人を尋ねるよりないようだ。

秩父カツエさん（明治四十三年生まれ）を知つたのは能代市の広報によつてであつた。

カツエさんの今住んでいる所は能代市日和山下、通称下浜と呼ばれる能代で最も海に近い集落だが、生まれた家はもつと海寄りにあつたと言う。

私が十か十一の子どもの頃、家が砂に埋まつて住めなくなつてここに引越して来た。砂に埋まつたのは私の家と母の実家、それに塚本さんの三軒で、ここからずつと海寄りにあつた。家をほごした（解体した）跡が穴になつていて、この先の高い所へ行くと以前は見えたが今は藪（やぶ）になつて行けないと思う。孫じいさんは日露戦争に行った人で、酒や蕎麦（そば）を出す店をしていた。それで家のあだ名（屋号）が「浜の家（え）」「茶屋つこの家（え）」と付いたんだと思う。

生まれ育つた家から引越すのは子ども心に氣持悪く、行きたくなかつたのを覚えている。そ

の年は佐平治（注・大原佐平治―下浜で廻船問屋・宿屋をやっていた）の小屋を借りて住み、次の年ここに家を建てた。その頃この辺には二十軒くらい家があった。ここは松のおかげで風当たりも少なく、砂が飛んでこない。

松林には小さい時から松葉さらい・きのこ採りによく行った。松葉はたきつけや御飯炊きに使うので、秋にはひと冬分五十マルキ（注・一マルキは四斗俵の縄でくくれる量）も準備した。

きのこ採りも松葉さらいも、入ってはならない所に居るのを営林署員に見つかると怒られ、松葉はやつと背負ったのをバラバラにされたものだ。松林の中も松葉さらいしているうちはきれいだったけれども、今はさらう人がいないからかえって汚れている。

松葉さらいなどしなくなつてからは、稲荷さんの日にお茶まま炊いて大森の稲荷さんに行ったくらいで、「風の松原」と呼ばれるようになってからは松林には行ったことが無い。松を植えていたころのことも分らない。（一九九六年六月聞き取り）

カツエさんにとって生活の中心は能代浜であり米代川であつて、漁師の娘であり妻であつた年月の中で浜の盛衰はしっかり記憶にあつても、松林は背景みたいなものでその必要性を意識したことは少ないようであつた。しかし、能代で飛砂のために引越しを経験した記憶を持つ数少ない方である。

松林はきのこの宝庫であつた

明治四十年生まれの私の父、大原仁三郎も下浜の生まれで、カツエさんの家のすぐ近くだったそうです。父のすぐ下の妹とカツエさんは仲の良い友だちだったそうです。

これは父が亡くなる三年前（一九八七年）に聞いた話です。

大正の初め、砂防林らしきものはなかった。大森稻荷神社のまわりや下浜に昔の人が植えた松がいくらか残っていた。海岸線は今よりずっと遠かった。大森より海側は砂丘が連なっていて、草、グミ、ハマナス、ハマボウフウが生えていた。イシゴオカ（石郷岡？）さんという牛乳屋の牛を浜に放していた。大森より下浜方面にもグミ、ハマナス、ハマボウフウ、柳、松の種からの松（実生の松）が生えていた。春先にはこの草原に火をつけて遊んだ。

大森神社の所は独立した山であったが、冬の間は雪の上に砂がたまり、春になると砂の下に雪が見えた。大正の初め頃だったと思うが、この大森のあたりの大きい松が砂に埋まり枯れてきた。

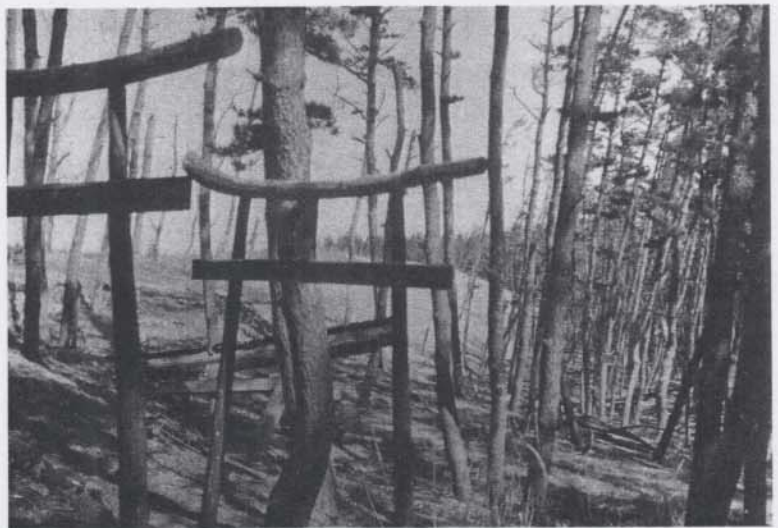
下浜の生まれた家には十四、五歳の頃までいた。下浜は砂丘の陰にあるので風もさほど当たらず、砂の害もほとんどなかったが、少し出ると風の強い日は砂嵐がひどくて目も開けられず浜に出られない時もあった。松林の中を通って学校へ通ったが吹雪で出来た雪の吹きだまりを破れず、学校へ行けない日もあった。ゲタの鼻緒が切れると裸足で泣き泣き雪の中を帰ったものだ。

きのこの時期には朝飯前に手籠（てかご）一杯採るのが日課で、難なく採れた。キンダケが下にあつて砂が盛り上がっている所を見つけると、まわりに大きく円を書いて「ここ俺の場所だ！」って叫んで。

小松原と呼ばれた所の植林が始まったのは、昭和の初め頃で、不作、不況のため農村で娘売りもあった時代で、「救農土木」と言われた。植林の後には人が入れないように回りを囲っていた。

戦争中の火事（昭和十八年）は、たまった松葉に火が付いた。あの時はどうなるか、どれ程広がるかと心配した。焼け残りを焚き付け用にだいぶ運んだ。

戦前は海の色が変わるだけ（程）サンマやイワシが採れた。浜で焼き干しを作った。浜に溝を掘って木を焼き、炭火を起こし、串に刺した魚を溝の両側に挿した。中島にはサンマの缶詰工場



大正12年、飛砂で埋まった
大森稻荷神社の鳥居

もあつた。

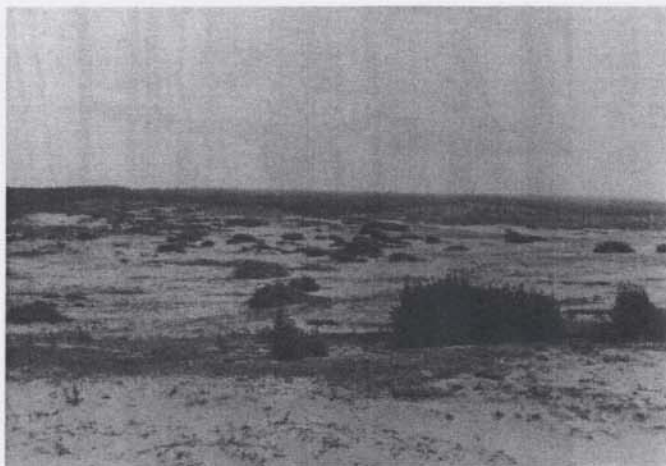
戦争中にはホッケを買いに浜まで走ったこともあつた。

浜野義雄さん（能代市川反町・明治四十五年生まれ、平成九年死去）は「風の松原だより」第二号

（一九九一年発行・風の松原を育てる市民の会）に寄せた「松原は市民の誇り」の中で、

「私は下浜で生まれ、少年時代を能代山（現在の風の松原）を背負うて育ったこともあつて、とりわけ風の松原に対する愛着が深い。当時、後谷地に生育する松で、最も古いのは樹齢七十年くらいで、キノコ採りもここしかできなかった。その頃は広大な白砂の砂丘が連綿と聳（そび）え、大森の稲荷神社は砂丘の頂上にあつた。海岸の砂丘の斜面には、ヨシズなどの風除けを造り、黒松の苗木を植え育てている光景が未だに脳裏に浮かんでくる。――」

と今から八十年程前の後谷地の様子にふれている。



戦前の後谷地と 富樫兼治郎氏の業績

砂防林を荒らす原因は？

近代「風の松原」の基礎を築いた富樫兼治郎氏は、明治二十九年（一八九六年）三月二十五日山形県鶴岡町大宝寺に生まれた。

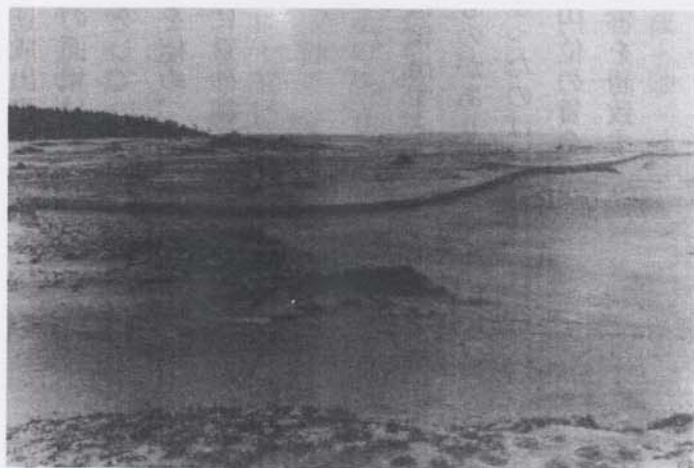
大正十年（一九二一年）東京大学林学実科を卒業、仕事本位の小林区署（営林署）を希望し、最初に赴任したのが能代小林区署（後の能代営林署）であった。

前述の証言のように、当時能代の砂浜は荒れるにまかせたまま、飛砂は吹雪のように林内に吹き寄せ、現在の大森稻荷神社の辺りまで被害が及んでいた。下浜集落では砂に埋まって引越した民家もあった。

藩政時代最後の植林を一八五〇年頃（推定）とすると、大正末期の一九二〇年代まで約七十年間、管理が行き届かなかった年月があったと推定される。明治維新を挟んだその間、なぜ砂防林が荒れたのだろうか。

「秋田縣海岸砂防造林史」（昭和八年発行・秋田県林務課）には、

「明治年代に至り、前砂丘地帯に自生するハマナスの根を掘り、その皮を採り、或は雑草灌木を燃料や飼料もしくは肥料として乱採して、それがどういふ結果をもたらすか考えなかったため、前砂丘はあちこちで破れ、そこからの飛砂が年々ひどくなり、ついに後方の黒松林を破壊し、再び藩政時代の惨状を呈するに至った。当時の大林区署（営林局）は砂防の計画をたて、大正十年より砂防事業を創始した。



大正末期、砂丘造り始まる

しかし、飛砂の根源は国有林外の西方砂地にあり、これを鎮めなければ事業の目的は達成出来ないで、内務、大蔵両省所管の砂地を移管し、又民有地の借り上げを行い、砂防地域の面積は一六〇ヘクタールに及んだ。——本砂地は、元安定していた当時は、比較的単調な地形をしていたのだが、前砂丘が壊れ、その飛砂が内部森林内に堆積するようになって、地形は複雑を極め、ますます荒廃がひどくなったもので、まず第一に地形の回復を必要とし、これと共に飛砂鎮圧上、砂丘の築設を要する——（要約）と書かれている。

又、『日本海北部沿岸地方における砂防造林』（後述）の中で富樫氏は、

「ハマナスの薈は染料となる関係上採集して萼（ガク）を去って乾燥し、大阪方面に輸出する。根皮はまた網類の染料となり痔の薬となる。されば根を掘って自家用或は売用とするものがあり、かかる人為被害が砂地荒廃の誘因となる。能代営林署管内の砂防施設を要するに立至ったのは、約四十年前前砂丘に自生するハマナスの根を乱採したのに原因する。その当時でも二円位の賃金となったとかで、競って掘り取ったものだ」と老人は語っている。その結果は今日の惨害を誘致するに至った。」

と述べている。

四十年前とは明治中期に当たる。その頃砂防林の管理がどの程度行われていたのか定ではないが、藩政時代には保護は地元民に委ねられ、その代わり下枝の採取が許されていたと記録にあるので、その延長にあったものと思われる。大正の頃になって委託林の制度が布かれ能代港町の委託林となって、落ち葉の採取や枯れ倒木の無償譲与が許されたので、付近住民は競って松葉掻きをし燃料としたのであった。

しかし、当時の住民の意識の中に砂地の植物が果たす役割、ひいては砂防林の必要性への認識がどれほどあったのだろうか。大部分の人が貧しかった時代、とりあえず明日の生活の足しになるもの、タダの物への執着は当然で、いつかその行為が大変な被害をもたらすことまでは考える余裕はなかった。

たのでしよう。又、こういう行為を強く戒める機関や人がいなかった、つまりは藩政時代の教訓が人々のあいだにまでは伝わっていなかったことになる。

又、これらを読むと藩政時代末期には、すでに前砂丘と呼べるものが海岸線に添って出来ており、砂地も一応安定していたものと思われる。

ノイローゼになった富樫さん

さて、造林と共に海岸砂防を担当することになった富樫氏は、荒廃極まりない砂地を前にどうしてよいのか途方にくれる日々であったが、多くの視察者の意見を聞き、古い記録を読み、波・砂・砂丘・風・海岸植物等の観測・調査に没頭しつつ工事の先頭に立った。

昭和初期に後谷地、能代浜で働いた人の中には、富樫氏を記憶している人も健在だ。

部下であった鈴木重孝さん（能代市景林町・明治三十九年生まれ）によると、

富樫さんは海岸砂防は全く初めて、右も左も分からないところから始めたので、何から手をつければよいかわからず苦しみました。海岸砂防は風によって左右されるからと、まず風の調査から始め、テントをかぶって二日も三日も海岸に泊まって一日の風の動きを観測したり、砂草（さそう）を調べるため北は深浦から南は男鹿まで歩いたりした。あんまり熱中してノイローゼになって二カ月ほど休養したこともありました。

これは奥さんから聞いた話ですが、ある時奥さんが浜に出てハマボウフウをみつけ、二、三本採って帰り、夕食の料理に使ったところ、大変な怒りようで『我々が心血注いで一本でも草を多くしようと頑張っているものを抜いてくるとは何事だ！早く行って元のところへ戻してこい！』と目の玉が抜けるほどしかられた、ということです。

その後、秋田営林局に転勤になってからも毎週のように土曜日の晩に能代に来て大原旅館に泊まり、能代の海岸砂防の研究を続けたのです。富樫さんの一番大きな仕事は、どういうふうに砂を鎮めるか、地形図の上に砂丘を造り、砂丘の間隔・高さをどのくらいにするかの研究を重ね、基本を作ったことです。

口ぐせは『仕事上でこれが最良と思ったならば思い切ってやれよ。もし、それが失敗したら、二度とその轍(てつ)を踏まないように』ということでした。また『海岸砂防は今必要で設けるばかりでない。これから何十年後、何百年後の津波などの天災を防ぐために遠大なる計画のもとに造っているのだ』とも終始言っておりました。

退職してからも能代には自分のやった仕事の結果を見るため時々来ており、渡部伯文さんと三人でよく海岸を歩いたものです。伯文さんと私は仕事の上で兄弟のように富樫さんに育てられました。私が在職中思い切った仕事が出来たのは富樫さんの教えがあったからです。(一九九二年三月聞き取り。鈴木重孝さんは一九九六年一月亡くされました)

仕事にきびしい人であった

当時作業員として働いていた柴田庄治郎さん(能代市臈渕・明治四十四年生まれ)は、

私は大正の終りころ、工事が始まったところから農閑期だけ仕事に歩いた。初めのうちは苗圃に、二十歳頃からは浜の現場に行くようになった。その頃、大森の稲荷さんの近くに作業小屋が建てられ、道具類や仕事用の資材が置かれるようになった。人夫は主に出戸、長崎、浅内、落合方面から来ていたが、通うのが大変な時期、私たち(男五、六人)は小屋に寝泊まりし自炊した。

小屋から現場までかなりの距離があったが、藁(わら)をはじめ、すべての資材がここから担がれて運ばれた。藁を運ぶのが一番難儀であった。藁自体は重くはないが背負って、一輪車も利



かない砂の上を一日に何回も往復しなければならぬ。作業中はタバコは吸われなかった。そのころ大量の藁を続けたのは鹹渕のイチの家（屋号）で、馬車で運んだ。

浜では、苗を植える段取りとか、植え穴を掘るのは男、植えるのは女の仕事であった。砂山を崩して平らにし、簾（すだれ）を張って砂を落ち着かせ、グミを植える仕事もあった。グミが熟れる頃になると箕（み）を広げ棒でたたいて実を採った。

苗圃では黒松、グミ（種・挿し穂）を育てたが、春先に枯れ死したのが分かるよう植え付けした人の名札を立て、仕事ぶりを競争させていた。

私は農繁期は家の仕事があるので、年間通して行つたわけではない。真冬には手間仕事に家で簾（すだれ）を編んだものです。鹹渕では真冬の仕事に簾を一枚いくらと請負で編む家が多かった。材料の萱（かや）は八竜の富岡・久米岡方面から営林署でまとめて買って、馬車で運んでもらい個々の家に配った。

富樫さんは実直な人で、あの人はど仕事熱心な人はいなかった。つられて人夫も頑張ったものです。私はこの浜で本当に松が育つのだろうかと半信半疑で仕事したものだ。富樫さんだつて果たして実現するかどうか夢みたいなものであつたかもしれないが、そういう気配は全く見せないで、『必ず将来立派な林になるから頑張ってくれ』って一生けん命励ましていた。

富樫さんの仕事は玄人の仕事、先の見通しあつての仕事であつた。小屋のまわりの大木を見ては『将来は皆こうなるんだよ』って、誠心誠意、心を込めてやらねばならない仕事であることを教え、いいかげんな仕事は許さないきびしさがあつた。

苗をボルドー液で消毒するとか、なんぼ掘つても砂だらけの所に藁を埋めて水をもたせることに気付いた点、松苗は二年生のもを使うとか、一本ごとに風よけを立てるとか、までに（ていねいに）育てたものだし、よく研究したものだと思います。

そんなに気をつけても、植え付けたものが皆必ず成功するものではない。砂に埋もれる所もあった。工事中は一晚のうちに家一軒分もの穴が掘られる事もあつた。風の力はすごいものだと思

った。

能代の砂防林は他より早く始まったようで、富樫さんに仕込まれた人夫のうち何人かは、本荘とか他の現場にも連れて行かれたものです。人夫頭から営林署の職員になった人もいます。

その頃も料亭の人たちが隠れてハマボウフウを採りに来ていた。

私は結婚してからも農閑期には浜の仕事に出た。朝、近所の仲間に『行くどー』『おー、行くどー』と声かけて、けら（わらで編んだ合羽）着て、菅笠（すげがさ）かついで通ったものです。植林の方は戦前には一区切りついていたようだ。

戦後始めて自分たちが植えた林を見に行った事があった。事務所の位置も変わっていた。（注・元は現在の市営グラウンド側から入った低地にあった。後に大森稲荷神社の近くに移る）『よくこう伸びたものだ』と思った。本当に松はきかない（丈夫な）ものです。これから一番の心配はマツクイムシの被害です。防除が大切です。（一九九二年三月聞き取り。柴田庄治郎さんは一九九五年二月亡くなりました）

松橋伸生さん（能代市臈淵・明治四十四年生まれ）・トミエさん（大正五年生まれ）ご夫妻も富樫氏の事をわずかに記憶していた。それぞれ、

あの人は仕事のまじめなきびしい人であった。

一番の頭で、きびしい人であった。遠くにおいても双眼鏡で見ているので油断出来なかった。と語っている。

トミエさんの話。

私は数えの十三歳から十九歳の秋に結婚するまで七年くらい雇われた。初めは苗圃の仕事が主だったが、そのうち浜の現場へも出るようになり、年間通してどちらでも仕事のある方へ回され

た。

そのころの浜は、海に近い方には草木はないが、少し陸に入ると砂山があちこちにあつて、グミ、ハマナス、ハマボウフウ、ハマヒルガオ、ナデシコ、とかの草木があちこちに生えていた。

春には砂山を崩して低い所を埋めならす土方仕事があつた。モッコは女が前、男が後をついだ。夏にはグミの種採りに行つて洗つて乾かし、次の年の春に苗圃に種蒔きした。また、若萌えを五寸（十五cm）位に切つて、バケツの水に入れておき挿し木にし、次の年に植えた。浜では男たちは植え付けの時の穴掘りや簾（すだれ）貼りの時の杭（くい）突きの仕事もした。草刈りは男も女も同じだった。人数は女の方が少し多かった。女はほとんど独身だった。今のように暖かくして歩いたわけではない、冬でもちぢり（綿の上着）、夏ははだこであつた。昔は着る物も地味だった。

冬の間に毎年毎年、簾が砂に埋まつて、春にはその砂を除く仕事もあつた。

夕方仕事が終わつて畠町あたりまでくると腹も減つてくる頃で、おやきを売るおばさんから、『おー、うめ匂いするな』つて買つて食べたものです。

仕事辞めて、きのこ採りに一回、他に一回位行つたかな。植えた松が背より大きくなって、山があまりにも変わつていてびっくりした。（一九九二年三月聞き取り）

一番面白かつた時代

松橋テフさん（能代市鹹渕・大正五年生まれ）もトミエさんとはほぼ同じ頃雇われたが富樫氏の記憶はない。



アキグミの種採り

私は数えの十四歳頃から、元東中グラウンドあたりにあった営林署の苗圃で働くようになり、十七歳頃からは主に海岸の植林作業に出るようになった。仕事は一年中あって、雨の日も風の日も鹹渕の自宅から通った。作業の始まるのは朝は七時、途中昼休みが一時間あって、終るのは夕方五時だった。現場は清助町、出戸、長崎、河戸川、落合、といろいろで、往復ほとんど歩きなので朝五時頃家を出、帰ると六、七時、冬場は暗いうちに出、暗くなってから帰ったものです。作業の内容は春は植え付け、夏は草刈り、冬は砂止めの簾（すだれ）張りなどが主なものでした。頭には夏も冬も手ぬぐいとふろしき、上着は筒袖の短着に十二尺の巻帯をきっちり巻き、下は膝がかくれるくらいの半もつべに長い脚絆（きゃはん）、足は夏はたかじょう、冬はひも結びの短靴（ゴム製）、雨や雪の日は菅笠（すががさ）にけら（すげやわらで編んだ）を着た。日当は昭和十年頃で、男が一日六十五銭〜七十銭、女が三十五銭〜四十銭だった。一日の日当で巻帯一本分又は袴（あわせ）はつぴ一枚分くらい買えた。仕事専用の着る物を、どの人も作っていた。

常時百〜百五十人くらい働いていた。鹹渕の人も多かったが、田所内、向能代、落合、鳥形とか町の人（旧市内）もかなりいた。

苗圃にいた頃、満州から現地の人が十数人見習いに来て、一年間「先生」と呼ばれたこともあった。

松やグミはそれぞれ種を採って苗を作った。松の種採りは、木に登って松笠を採り、陽に干してから二つ持ってぶつけて叩き種を落す。グミの種は実をザルに載せてアノコを漉（こ）すようにして川で洗いながら取った。グミの実を食べることは禁じられていた。

植林の順序は、まず砂丘になっている所は崩してならす。砂は二人ひと組、モッコで運ぶが、前の方は体力の無い人は担げなかった。ならした所に萱（かや）で編んだ簾（すだれ）を敷いて砂を落ち着かせる。一〜二年して砂が落ち着いて、雑草が生えるようになってから今度は松を植える。松は苗圃で一〜三年くらいになったものを馬車で運んだ。



まずバケツに水をいれ、根を入れておく。植え穴は深さ二十cmくらい、幅三十cmくらいに掘り、底に三つ折りにした藁（わら）を敷いて足で踏んでから砂を少し置き、苗を植え、掘り上げてある砂を戻し、根元を足で踏み平らにならす。何十人と行列になつての仕事で割り当てはなかつた。風よけは秋になつてから麦からを折つて三十くらいの高さになるようにして海側に立てる。夏は周りの雑草を刈つて輪にし、苗木の根元に置き日よけにした。植え付ける時も、その後も水は一切かけなかつたが、その割りに枯れ死はなかつた。

夏の草刈り作業は日陰がないので暑くて大変だった。冬は寒い時期に海岸で風避けを立てる作業があつた。雪よりも砂が吹いてきて、隣の人も見えないくらいの日もあつた。でも、天気の良い春は気持ち良かったですよ。

ふり返つてみて『なんぼさび（寒）でもよく歩いたもんだな』と思います。家から仕事場までの往復、仲間とワイワイ騒いで、歌つこの好きな人は歩きながら歌つたりして、一番面白かつた時代だった。

私はこうして昭和十一年頃まで作業に出たが、鹹渕の人たちの中には十六年頃まで続けた人もいます。

四、五年前、長男が林の中に道路がついたから、と車で見せに連れて行つてくれた。長崎から清助町方面までずうっと回つた。あれから五十年もたつて、自分たちの植えた松が『こんたに大つきくなつたたいなあ』つてしみじみとながめてきました。（一九九一年二月聞き取り）

富樫式植栽法をあみだす

富樫兼治郎氏の能代勤務は大正十年（一九二二年）～大正十三年（一九二四年）十二月までの四年

間であつたと思われる。その後、生保内営林署長を経て昭和二年（一九二七年）頃秋田営林局に転任、再び砂防を担当し能代にも度々足を運んでいる。

昭和十二年に発行され、昭和三十九年に再刊された富樫兼治郎著「日本海北部沿岸地方における砂防造林」は氏が能代、本荘、鶴岡、酒田等の海岸砂防現場で積み重ねた研究と結果をまとめた二百ページに及ぶ研究書である。鈴木重孝さんによると「めったに手に入らない貴重な本で、最初から最後まですべて手写しする人もいた」ということです。

この本の中には大正末期から昭和十年頃までの能代市後谷地国有林の様子が多くの写真とともにたっぷり出てくる。海岸砂防研究書の古典として有名なのだそうですが、能代浜でも実にさまざまな調査・実験・分析が行われ、失敗も又積み重ねられていた事が素人にも伝わってくる。

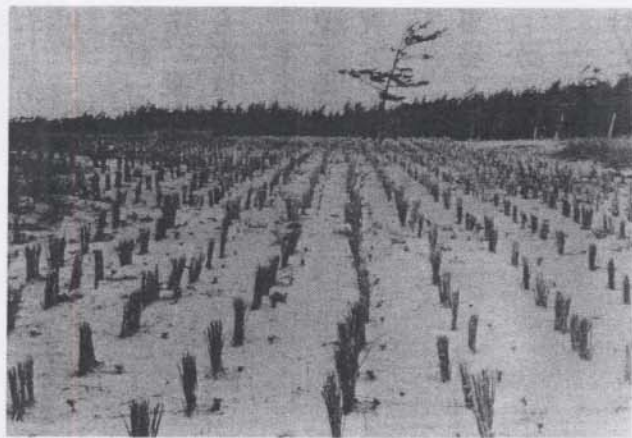
一つを例にとると、大正十三年度から昭和三年度までの五年間に植えられた黒松は累計七万五千五百〇本、このうち枯れたりして補植したものが昭和四年度までに七万四千一二〇本、実に九十八%に及んでいる。

又、氏は「大正昭和林業逸史・上巻」（昭和四十六年発行・林業経済研究所編）に「砂防と親しむ二十年」と題する随想を寄せているが、能代時代にもふれ、

「——大正十二年の春に初めて黒松の砂防植栽をやった。苗木は本荘小林区署から貰った二回床替えの三年生苗であつた。之が私の総領息子なのだから念には念を入れて成可く安定した安全と思はれる所を選んで真心こめて植えたのである。然るに夏季になったらあれ程熱心になって植えたのに殆ど全滅の有様である。——」

富樫氏が苦心の末にあみだした、一年生造林、埋め藁工及び衝立工は、実質昭和三年度から施工され、この植栽法により水分の不足による枯れ損が飛躍的に少なくなり、秋田営林局管内のみならず付近民間事業にも模範となつていった。

又、富樫氏は優良人夫の育成にも務め、事業の一般、植物の知識、はては測量・測樹の



クロマツ一年生造林、昭和3年4月
植えたもの（昭和4年撮影）

方法まで教え訓練し、一般労働者の指揮指導に当たさせた。以前、後谷地事業所向い側にあった植物見本園は人夫が自らこしらえ、種名も自らつけたものという。この見本園は、そばにあった湿地と共に私の記憶にもしつかり残っている。

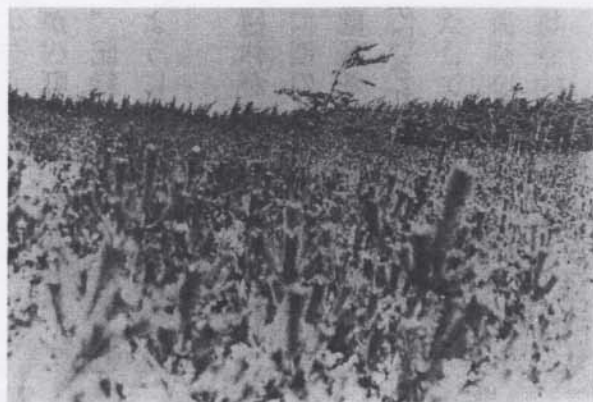
富樫氏は情熱的な研究家でありながら職人的な仕事人でもあったと想像される。海岸砂防という長い目で見なければ成果の分からない仕事と、予算に縛られ、目に見える成果を求める役所仕事の枠の中で、上司と対立する事も多かったようで、後谷地での砂丘の試験継続にからんで短気を起こし、三年がかりで集めた資料の大半を燃やしてしまい、後々まで悔いて

「――俺が俺がと我のあまりに強い私の業を悲しむ。」
と『砂防と親しむ二十年』を結んでいる。

昭和二十九年（一九五四年）二月、酒田営林局長を最後に定年退職、昭和四十年七月酒田市で亡くなっている。満六十九年の生涯であった。

新婚の地、能代で生まれた長男、洋（ひろし）氏は現在東京にお住まいで、私が地元紙に寄せた富樫氏の業績にふれた一文を送ったところ、大変喜んで下さり、さっそく仏壇に上げ、コピーしたものをお子さん、お孫さんにも渡して下さったとのことでした。その時、洋氏より教えていただいた戒名は「盡光院治山兼道居士」、生涯を海岸砂防に注いだ氏にふさわしい響きに私には感じられる。

昭和二十七年五月、能代市は砂防林の恩人として吉成貞助氏（大正末期の能代営林署長）と共に富樫氏を表彰し功をたたえているが、意外と能代市民には知られていないように思う。確かに官吏として給料をもらっていたのだからそれ以上は……という見方もあるでしょう。そうなれば栗田定之丞、賀藤景林も同じことです。時間から時間迄、義務的に仕事をしていたのではとうてい成しえない仕事



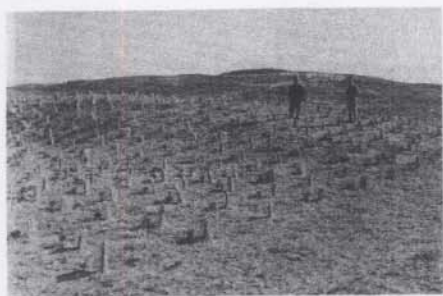
前ページと同じ場所（昭和11年3月撮影）

であることを認識し、全精力を傾け没頭し、かつ成功へ導いたからこそ評価されるのであって、まれにみる優れた人たちなのだと思います。

いつの時代にも大事業の成功の陰には心身の限界まで、まさに狂う程にのめり込んだ指導者と、それを支えた幾多の人たちがいたのであって、お互いの信頼関係がなければ実現は難しいのだと思います。戦前の能代の砂防林が、若い指導者と、当時の農村部の健康で忍耐強い娘や青年たちのエネルギーによって成し遂げられたことに、深い感動をおぼえます。

酒田市には富樫氏の顕彰碑があるという。能代には栗田、賀藤両翁をたたえる神社はあるが、町民である越前屋、越後屋家はじめ多くの砂防林植栽にかかわった人たちを顕彰する標しが無い。記録として残されたものは人目にはつきにくいもの、物事を後世に伝えるのに碑のもつ力を考えるようになった。

富樫氏が能代に來た大正十年（一九二一年）は、先にも述べたように藩政時代に能代浜の植林が一応完了（推定）してから、約七十年後であった。この七十年間で大被害を受けたわけだから、この教訓はもつと掘り下げられるべきだし、大正末期に一からやり直した人たちのことも、もつと見直されていると思う。近代「風の松原」の基礎を築いた恩人として、氏の業績はもつともつと明らかにされ、語り継がれていくべきだと思う。



戦中から戦後の 後谷地国有林

戦争中の山火事

昭和五十八年（一九八三年）の日本海中部地震が起きるまで、大半の人が日本海側に津波はないと信じていたように、過去の被害が伝えられてこなかったことが、明治期の砂防林や能代浜の荒廃を招いたように思われる。そして昭和期に入ってから、せっかく整いつつあった成林区域がまたしても被害に遭っている。

昭和十八年八月三十一日、日曜日の午前九時頃、旧展望台近くの造林地（大正十四年より昭和十年頃の植栽箇所）から出火、約二十一ヘクタールを焼きつくした。近くの松下造船の工具、消防団、一般市民合わせて約二千人が駆け付け消火にあたったが、火勢が強くほとんど自然消火だったという。この山火事を記憶している市民は多い。

小野草さん（能代市富町・明治三十七年生まれ）によると、

火事の日が九月一日となっているのが多いが、八月三十一日、八月最後の日曜日で、この日に間違いない。天気の良い日で、子ども二人を連れて浜へ遊びに行っていた。火事に気付き、子どもたち（小学生二人）を家に帰し、自分だけ浜から火事の現場に向かった。生木の燃え移っていく様子、火によって風が起るのをつぶさに見た。営林署の指示で防火線を設定していた。

また、住吉新作さん（能代市盤若町・昭和四年生まれ）は、「絆」九号（一九八六年十二月発行・能代勤労者文学会）の中で『能代の砂防林と私』と題し、

「――昭和十八年八月かと思います。私は小学校高等科二年生でした。大森神社の奥手、すな

わち『小松原』の中から、たばこの火の不始末による火災が発生しました。あの日はカンカンと照りつける暑い日でした。上空では東雲原飛行隊の練習機が何組も、クロスになったり空中戦を演じていました。山火事は見る見るうちに延焼し、結局下浜近くまで広大な面積を一気に焼きつくしてしまいました。あのとき大人たちが、防火のため鋸（のこぎり）やナタなど手にし、躍起になっていたことが、いまでも目に映ります。

後日、黒こげになった憐れな幼齡林は、各学校の燃料用として配給されました。私たちはその搬出にあたり、現場からいまの市営球場（昔は鉄砲場）まで強制労働させられました。四十余年過ぎた今日、その跡かたもありませんが二度とあつてはならないことです。――」

住吉さんは、現場にも行っており、

三、四に成長した小松原と呼ばれる区域でハツタケのある山であつた。消火の水も無く、自然鎮火を待つ状態で、監視哨の近くまで燃えた。跡片付け奉仕に一週間位行つた気がする。

とも記憶している。

火事の原因は子どもの火遊び説、たばこの火の不始末説があつて結局分からずじまいであつた。火事の教訓から、戦後林内に消防車が入れるよう防火線が整備されていった。又、子どもの林内立ち入りにも神経質になつたらしく、私たちが盛んに林に遊びに行つていた昭和三十年前後には、度々営林署の人に声をかけられた。当時大森稻荷神社裏手にあつた監視塔から絶えず目を光らしていたらしく、見回りの人がどこからともなくやつてくるのだった。

今になって思うことは管理する人たちにとって、どんなに山火事が恐ろしい事か。もちろん私たちも林の中で火を使うなんて考えてもみなかったが、親にきつく言われた記憶が無いところをみると、大人自身の自覚もいいかげんであつたかもしれない。

大人のいいかげんさは林の中のゴミによく出ていた。なんでこんなものまで、という位布団から茶

碗まで家中のありとあらゆるものが捨てられていた。林の中に道路が出来てから特にひどくなったという。これは残念ながら今に至るも続いている悲しい能代市民の習性です。

戦争と松林

戦争中（太平洋戦争）から戦後にかけて、後谷地砂防林の管理がどの程度行われていたのか、どんな状態だったのか、くわしく知っている人に私はまだ出会えていない。資料によると植林は昭和十九年度にも行われており、その後三年間の空白があつて昭和二十三年度に再開されている。

前出の小野草さんは、

戦争中、下浜の先端にあつた能代防空監視哨に責任者として昭和十八年春まで勤務のかたわら日夜通っていたが、松林の中は手入れをしていない印象で、戦争とはこんなところにも影響があるのかと感じていた。

防空監視哨の建物のすき間から砂が入り込み季節によっては掃除が大変だった。

昭和二十年、松林の松にバラ線を巻きつけて敵を防ぐ計画が立てられ、家々の垣根などに張っていた有刺鉄線を供出させ、松林に運んだが実際にはやられなかった。

と記憶している。

又、平成八年一月、北羽新報に投稿された戦争前後の記録「耐乏ひたすら続く日の一身边」の中には、

「——市民の中には、今は市街地になっているが、郊外の松林寄りの空き地に疎開の荷物を入れる小屋掛けする人も多く、次第に住居化し、街場の住居は空き家同然になって——」「——六月初め、国有林内の松根を掘り、それを乾留する『松根油』作りが海軍省の指示で町内会や各種

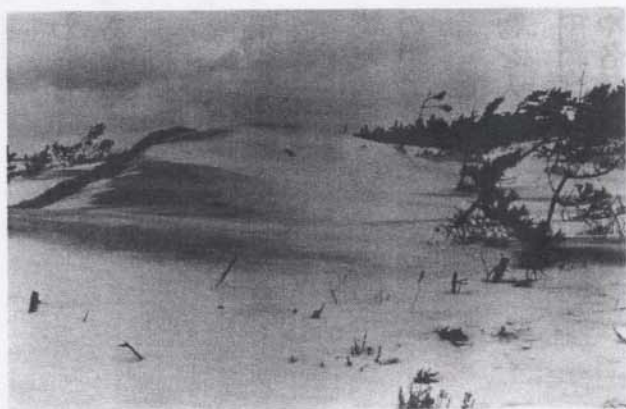
団体が勤労奉仕し、市民総参加の形式で行われた。——」
と松林に関連した記述がある。

この松根油作りは能代では昭和十九年頃からはじまったようだが、労多くして採れる油はわずかで、それがまただけ効果があったか、今では疑問視されている。松は枯れた老齢木であったというから、惜しくはないものだったでしょうが、林のあちこちにそれとすぐ分かる掘られた穴の跡がつい最近まであった。

鈴木重孝さんの著書「能代市砂防林の歴史」（昭和六十二年発行）によると戦中、戦後の状況を、

「——海岸砂防工事のような戦争に関係しないものは一切予算は認められず、放置の状態に置かれた。そのため海岸砂防林の生命線である前砂丘は破壊され、それより風列を起して飛砂は扇の如く広がり、ようしゃなく林内に吹きつけ林縁は堆砂垣の作用し、材木はどしどし埋没枯死せしめこの作用がどんどん内陸に進入し、戦時の五ヶ年間砂防林の破壊された面積約六十ヘクタールに及び、往時の飛砂激甚の様相を呈するに至ったのであります。昭和二十三年以降予算化され復旧工事に全力を尽くすことに成ったがあまりにも被害が大きかったので何から手を付けて良いか、とんと見当がつかない。——」
と記している。

たつた四、五年の空白で六十ヘクタールの被害である。同書には当時の能代営林署の住友重久課長の苦闘の様子も描かれている。昭和に入ってから築かれた人工砂丘は未完成のものだったのだろうか？まだ安定していない脆（もろ）い段階だったのだろうか？とにかく又もや振出しに戻った状況であつたらしい。一旦荒らしてしまうと地形が変わってしまったて、その区域を回復させるのに又一からやり直しになるのだ。



戦後の復工

袴田与一さん（能代市寿域長根・昭和四年生まれ）は戦後の復旧工事の始まった昭和二十三年からの現場を知っている。

私は昭和二十三年営林署に入り、すぐ能代浜の砂防事業に配属になった。

当時、海岸線の砂丘（戦前に造られた前砂丘、下浜から長崎まで約三・八km）のあちこちが破壊され、砂が入り込んで相当な面積の松が枯れていた。三〜四mに育った十年生ぐらいのものであった。戦争中は予算もつかず、人手不足もあつて手入れできなかったのでしょう。自然の破壊力は恐ろしいものだった。

戦争中といえば、昭和十八、九年頃、青年学校で能代浜へ植林の勤労奉仕に行ったことがある。営林署員の指導で小さい苗を、「ひとくわ植え」といって埋めわらも使わないで植える簡単なやり方だった。海岸線からかなり街側の区域だったから、あんな植え方でも根付いたのでしょう。着物にゲタやぞうり姿の母さん方も大勢いた。

復旧工事は私が入署した昭和二十三年ごろから始まった。当時はまだ機械力はなく、すべての資材は人の背に担がれて運ばれた。着る物も履く物も今のようには丈夫な物はなく、真冬に簾（すだれ）を付ける作業にゴム手袋もなく素手だった。手は動かしている間は冷たさを感じないものだ。体も寒いには寒いのだが、これが普通だと思っていた。寒い時は動いていないと耐えられないから、ひたすら体を動かして働くのです。

再生ゴムの長靴は弱くてすぐ割れてしまい、上から入った砂が下から抜けるから、破れているとかえって都合がいいようなものだった。長靴に砂がびっしり入って抜かれないこともよくあった。

春、秋の飛砂は吹雪のようで、目を開けていられないくらいで、そんな日に現場に向かう時は

前の人にくつついて行かないと分からなくなる。よく間違えたものです。

夏はステコ一枚でかけや打ち（砂丘を造るためのくい打ち）作業、地下足袋（たび）も熱くなって、海岸に打ち寄せられたゲタを履いたりする人もいた。

雨の日は合羽（かっぱ）もなく、けらを着た。どんな天候であっても適期適作業、仕事は年中あった。

当時の人は今の人はとてもまねできないくらい働いていた。あれほど汗を流し、苦勞しても、やめたいという人もいなかったし、つらいとか大変だとかあまり感じなかったのは、骨折る以上に楽しさがあったからだと思う。作業員は男女とも二十代が中心で、同じ年代の仲間がいるせいか皆楽しそうだった。砂原でごはんを食べ、昼寝もせずに、押つけたの引っぱったのと遊んでいた。自然の中での仕事だったこともあるかもしれない。

今でも当時の仲間と出会うと必ず「あのころおもしろがったな」「昔の仲間と一杯やりてな」という話になる。「後谷地会」という浜で働いた人たちの会があつて、二十年ぐらい前一度集まったのだが、昭和の初めごろから浜で働いた人となると大変な数で、その時も二百人以上に連絡したように思う。

若い時代の精いっぱい頑張ったという満足感でしょうか、皆忘れられない思い出になっているのです。私も苦勞したことより楽しみながら仕事した思い出が多いのです。

昭和二十五、六年ごろの松くい虫発生時は弱った大きい松（老木）がやられた。まだ薬剤防除もない時代だったから、木の枝が黄色がかったくと即切り倒し、虫が入っている間に皮をはいで焼却処分した。

エサ木（虫を集める）の調査をしたり、風倒木の処理、盗伐監視、いろんな仕事があった。冬はスキーで林の中を巡回し、盗伐者を追ったこともある。

能代浜の植林は昭和三十五年ごろまで補植を含め続いた。私の海岸の勤務は昭和三十八年まで



堆砂垣を造る

の十五年間で、その後、種苗事業所に転勤、六十三年退職した。

今も年に数回は松林に行つて自分たちの植えた所を回ります。『このケド（道路）物背負つて、ここで休んだ』とか思いながら……。同じに植えても大きく育っているのと小さいのと差があります。『オレと同じで大しておがれね（成長できない）松もあるな。それでも年いったいな。ちつちえても（小さくても）おっきい木に負けねで、頑張つておがれや』つてついつい声をかけている時があります。

海岸の松は成長は遅いですが、固く引きしまっています。根元の方を輪切りにしてみると年輪の中心が風の来る方に寄っています。それだけ風の影響を受けているわけです。

今は我々が頑張つて植えた松があんなに成長したおかげで大きい松（明治以前からの）も守られ、能代の街も守られてきた。グラウンドのまわりの老齢木だって限界あるだろうし、その後は我々の植えた松が代わりを果たすだろう。いい職場であった。末代まで残るいい仕事、大事な仕事をしたんだなあと思っています。

飛砂の害を知らない今の人たちは砂防林の果たす役割を忘れがちです。今は苦しみが分からな
いから大切さが薄らぎ関心がないのです。もっと海岸に住む者の自覚が必要です。（一九九二年
五月聞き取り）

昼休みにダンス

袴田与一さんと同じ頃、中川礼子さん（能代市鯨渕・昭和三年生まれ）も少しの間働いた。

私の姉は戦争始まる前、しばらくの間行っていたが、私は昭和二十四年の秋頃から二十七年の秋まで三年間働いた。仕事がなかった時代に、月三千円〜四千円位だったから、良い仕事だったと思う。初めは苗圃に雑役で、その後浜へ回された。浜ではいろんな仕事をした。春は植林の手

伝い、夏には松林の中の下刈り、他には簾（すだれ）立て、簾編み、雑務の仕事とかいろいろあった。秋にたんぼ会用にキンダケ採りをしたり、ヤシヤブシの実を採ったこともあった。ヤシヤブシは種を採ってよそに送ったらしいです。

私は体も小さいし、それまで力仕事はあまりやったことがなかったので、簾や杭（くい）を背負って運ぶのがきつかった。砂地の細い道路を、砂に足をとられながら運んだ。簾編み、縄編みは主に冬場の仕事であつたが、一日の割り当てがあつて、競争した。早い人に比べられるので、指から血を出して必死であつた。手が荒れて長くはやられないと思つた。

林の中にはうっそうとして気持ちの悪い場所もあり、変な男がウロウロしていて藪（やぶ）の中を追われたり、夫婦者の自殺を見てしまつたり、今でも忘れられない怖いこともあつた。

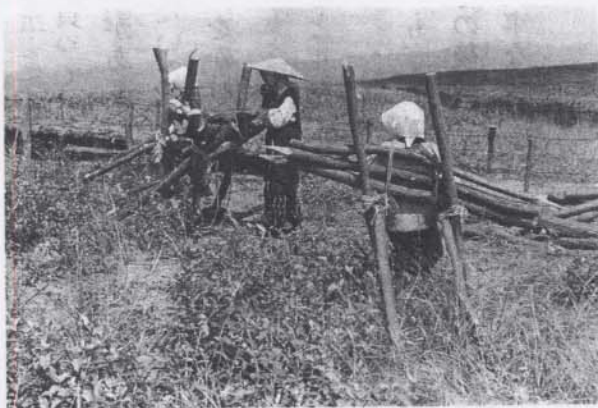
楽しかった思い出といえば、藤田さんという大学卒業した職員の人が昼休みにダンスを教えてくれたこと。

私が辞めた頃は、そろそろ浜の仕事も終り頃で、鹹淵にあつた苗圃は昭和二十五、六年頃朴瀬（ほのきせ）に移っており、鹹淵の人たちは道地（どうじ）から船で通うようになっていた。（一九九二年二月聞き取り）

高校時代にアルバイト

戸松健蔵さん（能代市鹹淵・昭和十年生まれ）は昭和二十九年三月に高校を卒業、七月まで後谷地の事務所で事務手伝いをし、七月から正式に営林署員となつたが、浜の現場経験は、昭和二十八、二十九年と、高校時代春休みにアルバイトで行つた時のものである。

仕事は植林の際の印し付け、防風垣造り、藁運びなど。藁は事業所から浜の現場まで一往復二時間（途中二回休憩）位の所を、女三束、男五束背負い、午前二往復、午後三



往復した。アルバイトは男十二、三人、女の子も何人かいた。砂道なのでズックに砂が入るし歩きにくかった。

一般の作業員は女の人が多く、二十歳前後の結婚前の人が多かった。男の人二十代前半の人が多かった。常時雇と臨時雇の人がいて、常時は十四、五人位、四、五月の植え付けの時は臨時が百、二百二十人にもなった。当時女の人で日給二百四十円位であったが、仕事の出来具合で、多少の差があった。農閑期の手間取りとしては待遇良かったため、営林署の仕事は皆のあこがれであった。製材所へ行くより倍の賃金貰えた。

望楼（やぐら）のあった所から一〇〇m位海側にいった所に植えたが、この頃植えたものは港の工事などでかなり切られ、あまり残っていないようだ。松の間にハマニンニクとかグミも植えた。ハマニンニクは浜の中に育苗するところがあった。

今はああいいう仕事は出来るものでない。特に冬の仕事は厳しかったと思う。真冬には下ズボン三枚にズボン二枚はいた。なにしろ風が強くて、風速五で砂が転び（ころがり）、十mになると飛んでくるので、それだけ厚着しないと痛いのだ。海岸に杣小屋（そまごや）を建て、その中で弁当食べた。

大森神社のあたりは先に植えたもので、今は天然林と呼んでいるが、天然林が倒れると報告が必要で、手続きが大変だ。去年（一九九一年）の台風十九号では天然林五本位にアカシア数千本倒れた。ほとんど下刈り済みの、細いアカシアを切った所に集中していた。松は根が浅いので倒れやすい。密になっていればこそ保っている。良い教訓であった。

今、ゴミを拾ってあるのは年配の人が多い。（一九九二年三月聞き取り）

マツクイムシ調査に三年間無休

昭和二十四年前後、能代営林署後谷地砂防事業所に勤務されていた方がた、営林署の関係担当官はすでに故人が多く、当時のマツクイムシに関する情報を知っている人は少ない。前出の袴田与一さん、中川礼子さんと同じ頃、能代浜で三年間マツクイムシの調査に熱中した青年がいる。現在秋田市にお住まいの石井邦彦さんだ。

私は昭和五年能代市機織に生まれた。

昭和二十四年に能代営林署に入り、すぐに後谷地砂防事業所に配属となった。この時の上司が住友重久さんであった。

能代で三年間勤めた後、昭和二十七年農林省林業試験場秋田支場に移り、研究者の道を選んだ。日本の各地の林業作業の現場を対象に、一貫して林業労働の労働科学的研究に四十年にわたって従事した。

現在は秋田県林業労働対策基金に勤務し、林業雇用改善アドバイザーとして頑張っている。

風の松原は数多くの先人によって完成された財産です。このことを能代市民は決して忘れないように、常に感謝の気持を持って欲しい。今は健全な良い松林でも、油断をして防除対策を怠れば全滅することもあるのです。

石井さんが定年退職後、筆を執った「森林は叫ぶ―山と木と人の物語―」（月刊AKITA・平成六年四月号）には、能代時代の勤務状況、その後の研究生生活がくわしく書かれている。

「――はい」一つの論文がある。

『能代営林署管内後谷地国有林に於ける松穿孔虫の生態調査について』

能代営林署 農林技官 住友重久

この論文は昭和二五年四月、日本林学会大会で発表された学術論文で、後谷地国有林、現在の「風の松原」において、マツクイムシの生態調査をした報告で、林業関係では貴重な文献の一つとなっている。この報告にはマツクイムシの防除対策についても触れている。それ以来、この研究成果にもとづいた防除対策は営林署職員によって実行され、海岸砂防林が保護されてきたことは言うまでもない。

——住友さんは私の社会人第一歩の上司でした。私の最初の仕事がマツクイムシの調査助手だったことから、前出の論文は私の大切な宝物なのです。

住友さんは一口に云って「厳しい上司」だった。私は林業知識が全くないまま、マツクイムシの生態調査を命じられた。後日、研究生活に入ってから分かったことですが、ある調査を始める場合は、調査の目的と方法が示されるものですが、住友さんは具体的な調査方法を示してくれなかった。ただ、加辺正明博士、井上元則博士のマツクイムシに関した事項を印刷された参考書を渡されて、それを参考にしながら調査するように指示されただけだったと記憶している。

——この調査は昭和二四年四月から二七年五月までの三年間、一年三六五日、一日も休まずに無我夢中で、マツクイムシの生態や気象の観測、七六〇ヘクタールに及ぶ林内の巡回視察を続けた。手元にある当時の勤務簿がこのことを如実に示している。現在では考えられない勤務状態だった。

二〇歳にもならなかった私は「友達が休みで遊んでいるのに何故俺だけが……」という反発があったことは否定しない。今になって考えると、住友さんは、生態調査の仕事を通して「仕事は忍耐強く、地道な継続が必要である」ことを無言のうちに教えてくれたのだと思う。

この苦しかった貴重な体験は、この後、四〇年も続いた林業労働に関する研究生活において、常に研究とは何かを考える基盤になったことは言うまでもない。私は社会人第一歩において良き上司に恵まれ、三年間のきびしい職務のなかで、大人になるための成長ができたと思っている。

又、定年退職後、秋田に帰り、四十年ぶりに風の松原を訪ねた時のことを、

「——そこには昔の後谷地砂防事業所や苗畑の面影も全くなく、事業所跡にコンクリートの三和土（たたき）だけが残っていて、マツクイムシの飛来調べをしたところには池がつくられ、松原の入口近くの松林は伐倒されて広場になっていて、あまりの変わり様に今浦島太郎の気持で、感慨無量だった」 「日本の各地の松林がマツクイムシの被害で絶滅寸前なのを見ているだけに、風の松原が無事だったことに安堵の胸をなでおろして、何時までも被害がないようにと祈りながら帰路についた」

と書かれている。

石井さんからいただいた住友氏の論文の中には、

「——この老令林は能代市の委託林となつて居り、市民の落葉落枝の採取と相まって、地表は植物に依つて被われる事なく、砂地の状態を呈して居り、樹勢は年々衰弱の一途をたどりつつあり、冬期間の強風によつて、年々四〇五〇本程度の風倒木を生じて居るのであります。斯かる状況に於ける禁伐林の取扱いが、害虫發生の温床となつた様に思われるのであります。

——昭和二二年度被害本数六五四本 材積七一八石、昭和二三年度被害本数三八八本 材積五一八石、昭和二四年度被害本数一四七本 材積二三一石で、この三年間の実績から見て能代営林署管内に於いては被害が減少傾向を取つて居り、今後、被害を減少させる様努力する考えである

等々、今からちょうど五十年前の後谷地の被害のようすが素人にも分かる個所があつて、被害防除の具体的な対策の記述とあわせて興味深い論文です。

又、この調査が困難を伴うものであつたことを述べ、石井さんの名前を載せて、

「同君の努力に対しては深甚な感謝の意を表する」

とも記述している。

現在札幌にお住まいの住友氏とは、現在も交流が続いているという。

「森林は人なり」を座右の銘として、今なお林業で働く人の労働環境の改善や、森林と人間のかかわりの大切さ説いてやまない石井さんにとって、後谷地の砂防林は青春時代に研究者の道を選ぶことになった原点だったのです。（一九九六年六月聞き取り）

女性として現場で働く

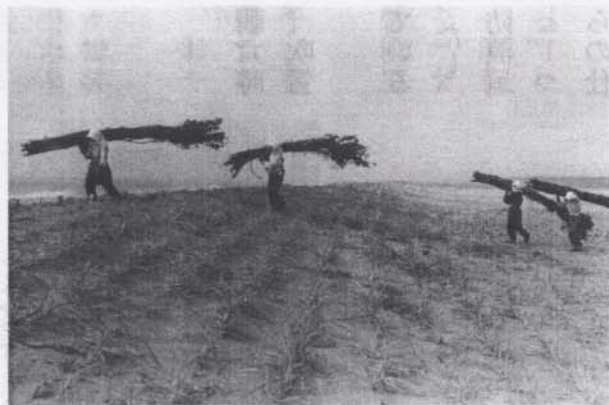
Kさん（能代市寿域長根・昭和八年生まれ）、Mさん（能代市・昭和八年生まれ）、Yさん（能代市長崎・昭和十年生まれ）の三人は昭和二十七、八年に雇われた仲間だ。Kさんは約十年、Yさんは約三十年、Mさんは定年まで四十二年間勤めあげた。女性として戦後の「風の松原」の歴史を肌で知っている人たちだ。それぞれに印象に残っていることを語ってもらった。

Kさんは、

私は十年位しかいなかったし、まかない（食事の準備）の仕事が多かった。後谷地でモッコか
ついで砂運んだこと、春休みにアルバイトの学生がたくさん来たこと、三十年頃から常用作業員
になって紺の上着とモンペが支給されたこと、外国の人が視察に来るといので、道路を造った
り、掃除したりしたこと（昭和三十年頃、FAOⅡ国連食糧農業機関の視察があつた。この時、
事業所の裏には立派な便所が造られたことなど思い出す。

今は秋になると松林へきのこ採りに行くのが何よりの楽しみで、『何たら旅行より面白れよ。
キンダケ採って来て家で土落としたら、その土、次に行った時、必ず山さ撒（ま）いでくった

よ』



Mさんは、

昭和二十七年（一九五二年）から平成六年（一九九四年）、満六十一歳まで四十二年間働いた。臨時、常用を経て正職員になったのは昭和五十二年であった。辞めるときは女の作業員では最後であった。

初めの頃は何でも背負って運んだから、海に仕事に行く時は自分で使う縄を腰から離されないものであった。帰りに荷物があるとそれを使う。

大開浜の方でマツクイ虫の薬をヘリコプターで撒いた時は、早朝から目印に立った。後谷地の方ではホースで薬撒いた年もあった。

風の強い時は簾を背負っているとあおられ、横になって進んだ。『道路が砂っ原だから行くつたって半分後ろさ引っこんで来るんだもんで前さ進まないやつた。前の人の歩いた足跡さカップポカップポ入れていくと歩きやすい』

工業団地の造成地造る時、最初二百m切られるって聞いた時は『いだわしなあ。あんたにホネ折ったじ、ホネいだわし』って毎日しゃべっていました。

Yさんは、

最初の頃は仕事始まりが七時半、終るのが四時半であった。落合まで歩いて通った頃は朝六時に家を出ないと間に合わなかった。浜に着いても砂の中を歩くのはかどらないのだ。又、吹雪の時など、一人だと『あい、どっちゃ行けばやった』てなもんで何も見えなくなる。

落合では、グミの山を均すのにトロッコで砂を運んだ。一日の割り当ての仕事が決まっているので、早く終らせたくて競争した。ハマニンニクを採るのも一日何十束と割り当てがあったし、秋の簾編みも何枚編んだか調べるので必死であった。芝絡み（しばからみ・最前線に造る防浪垣造り）は冬の仕事であったが、波が高いときは逃げないとかぶってしまう。『ソラ、来たどーって上がって行くたって、カップパ着てるし間に合わないとケッツ洗われらった』波を見ながらの仕



事であった。

雪のため松の枝が倒れ、直しに歩いた年もあったし、虫が大発生して『つくだ煮にしたら』という位いた年もあった。グミの種採りに土崎に一週間も泊まりがけで行ったこともあった。昭和三十年頃の冬に人工砂丘造るため、下浜のはずれから砂運んだが（この時はあゆみ板の上をリヤカーに砂を積んで）せっかく運んだ砂が一晩で波にさらわれたことがしよちゅうあった。普段でも土手（人工砂丘）の崩れるのがひどかった。

私は臨時で採用され、二年で常用になった。常用になるとボーナスも付いた。結婚して子どもが生まれるときは産前産後の休暇をとれたし、あとでは生理休暇もとれた。姑に子どもを見てもらって仕事を続けることができた。保育所のなかった頃は、子どもを連れて来る人もいて、おやつを持たせて指導員（営林署の）の家の人に見てもらっていた。

平成四年に仕事をやめてからも、『トツチャ散歩しにあべ（行こう）』と夫を誘って時々松林に行きます。『いい、テントあって、ママ（飯）食ったごだ』などと教えると『おえのめ（自分の家の前）歩いてらじみだいだな』と言われます。

亡き父母と私にとっての松林

公園の裏を通って浜に出る途中の道端に腰の位置あたりで枝分かれした松がある。腰を掛けるのにちょうど良い。この松で父は小さい頃からよく遊んだという。生前父は毎年一月一日には松林に出かけていた。工業団地ができるまでは大森の稲荷さんの脇を通り海に出、海岸を少し歩いてから生家のあった下浜集落に入り、公園に抜けるのが毎度のコースだったようだ。この道順こそ私が友人と共に四季おりおり、何十回となく通った道で、例の枝分かれの松で一休みしたものであった。父が生まれる前からそこにあり、今も変わらずそこにあつ



て人々を憩わせてくれる一本の松。

いつもは一人で出かけていたのに、平成二年の正月、父は次兄とその息子の三人で出かけ、生家のあった所へも立ち寄ったという。その日から十八日経て倒れ、たった二日の入院で八十二年の生涯を閉じた。

私は六人兄妹の四番目だが、いつも忙しい両親に遠慮し、姉や妹たちほど積極的になれず、そのうちに反抗期を迎え、とうとう父とは最後まで馴染まなかった。いつも話をしているうちに、続けるのがイヤになってしまうのだ。父の話を真面目に聞いたのは、松林の事を聞いた時だけだったような気がする。何時までも反抗期の尾を引きずったままの私を諫めるでもなく逝ってしまった。

父は会社勤めのような堅苦しい仕事を好まず、自分の体一つで出来る商売で、私たちを育ててくれた。貧しい漁師の家に生まれながらも、海や松林の恵みを受けて育ったせいも、自然に接することが商いの中でも支えになっていたらしい。晩年は配達のついでに浜や松林へ寄るのを楽しみにしていた。いくら反抗しても交じり合わなくても、父と娘は後谷地の松林の同じ道を歩き続けた仲間だったのだ。「俺がだワラシの時、腰掛けで遊んだ松の木まだあらたってば」の言葉に私は応える言葉を失っていた。

私の母、大原ノリ（旧姓・杉測）は大正三年、今の合川町増沢に生まれた。子どもの頃は七座の天神様のあたりが遊び場であったという。若い頃一家を挙げて能代に移り住んだのだが、母の話をも又、私は何時も右から左と聞き流すばかりで、他の兄妹のようにきちんと記憶していない。山村の中で育ったせいも、山菜採りやきのこ採りが好きで、能代の松林でのキンダケ採りにも数えきれない程通った。晩年は神経痛だ、腰が痛い、足が痛いと言いつつも、春秋には俄然元気が出て、「俺、今年も行けるべが」と言いつつ、ひたすら誘いの声を待っていた。唯一の楽しみであった山（林）行きを諦めた平成六年七月、満八十歳の生涯を終えた。

両親は能代で所帯を持ち、鷹巣町で暮した時もあったが、昭和十九年再び能代に移り、私や妹たちは能代市本町（今、西通り町）で生まれている。

実家から松林までは約一キロメートル程の距離なので、小さい頃からよく遊びに通った。萩の台の今お寺の並んでいるあたりでもきのこ採りができた。

浜へも数えきれない程通った。大森の稲荷さんの脇の坂道は砂だらけで、昇り降りはいたい裸足であった。坂の上は大きな松林、少し行くと小松原が一面に広がっていて、海が間近になると植林間もない苗がヨシズの柵に守られて、グミと交互に並んでいた。歩道の行き止りには、海岸線に並行に造られた砂丘（防浪垣）を越えるための小さな木の橋が架けてあって、それを渡ると砂浜に出る。浜にはハマエンドウの群生地があちこちにあつて、花の時期は紫のじゅうたんが実にきれいだった。

ハマエンドウの実をカマス（布袋）にいっぱい採ってきて、母に茹でてもらったり、マツカサ（松ボックリ）やマツバ（枯れ松葉）を精一杯背負って来て、たきつけにしたり、父の時代とは比べようもないが、生活の足しになる手伝いもあった。

中学校は能代一中だったから、松林の中にあるようなもので環境は抜群、昼休みに、放課後に、天氣の良い日は海までひとつ走りしたものだ。学校の裏手には今は見かけない、アカボンスと呼ばれたおいしいきのこがあった。グミの実も「ケツツとっぱる」（便秘になる）と本気で心配しながらよく食べた。能代公園も隣庭みたいなもので遊び場には事欠かず、木に登ったり、合唱したり、海まで連なる白神の山並みや米代川をたつぷり眺めて過ごした三年間だった。

多感な時代に海や林に馴染んだせいも、卒業してから何かにつけて出かけた。同好の友人と行くことが多く「きょう行くが？歩き？自転車？」で話しは通じた。

海も林も春夏秋冬いつ行っても、何度通っても飽きることはなかったのだが、工業団地造成のため海が埋立てられたり、結婚して鹹澳に来たこともあって、次第に遠のいてしまった。今では一年に数回しか行かない。しかし、二十数年実家で暮した日々のうちに体に染み込んだ、松林を越えて伝わって来る風の音や、四季おりおりの海の色、松林の匂いは今も色あせることは無い。

父を育て、母を楽しませ、私たち兄妹を自然大好き人間に育ててくれた能代の松林。父母も私たちもこれまで恩恵を受けるばかりであった。思えば子どもの頃はハマエンドウの実を採ったり、きのこ採りに熱中して小松原をやみくもに潜り抜けたり、申し訳ないこともやっていた。これからの私は父母の分も含めて、自分に出来る事で少しでも恩返ししたい気持でいる。

父が亡くなった時、母と私たち兄妹は能代市に木製のベンチを一基寄贈した。今も風の松原のいいのひろばにあつて、皆さんを休ませ、父も又大好きな松林の風の中で休んでいると思うと、私たちの気持もなごむのである。

林や森は、そこに少しでも関わったすべての人に「物語」をもたらし、と私は思う。私の両親には私がここに表せなかった沢山の想いがあつたろうし、他の兄妹たちも同じ事だろう。

日本海からの烈風をやわらげ、砂を鎮め、それだけでも能代に生まれ、能代で暮したすべての人に、後谷地の松林は影響しているのだと思う。

それぞれの「物語」をそれぞれのやり方で語りついでほしいと思う。



能代浜（昭和39年6月）

あとがき

海岸砂防林としての後谷地国有林は昭和三十五年（一九六〇年）頃ほぼ完成した。

その後、今日までの四十年に近い日々の中で、大小さまざまな変化があった。昭和四十六年（一九七一年）に始まった臨海工業団地造成をめぐってのやりとり、徹底討論の末の一部伐採。昭和五十八年（一九八三年）の日本海中部地震。六十年代に入ってから市民のいこいの場としての整備……今の私にはまとめきれない。

又、「風の松原」は全体の面積から見ると民有林部分の方が多いわけだが、そちらの調査はほとんど手をつけていない。松林の生き字引であり、沢山の貴重な写真や資料を残された鈴木重孝さんも亡くなられてしまった。鈴木さんのことも少ししか書いていない。

すでに公表した文の再掲も多く、間違いもあるかも知れない。私が調べた事はほんの一部分に過ぎないと思う。ワープロも未熟、すべてが力量不足なのを承知の上で、今とにかくこの冊子を世に出すことにしたのは、素人があれもこれもと完璧を求めていることになるか分らないと思ったからです。足りない部分は又機会があるだろうし、行政や他の人が、より完全な記録を作ってくれることを期待したいと思う。いずれにせよ、こうしたものが多くの人の目にふれることで、松原がより身近になり、関心が高まることを切に願っています。

資料が整っていない点では空白ともいえる近代の松原の成り立ちを、そこに汗した人たちの証言を中心にたどってみて、植林に携わった人たちの精神の崇高さにふれることができたのは望外の幸せであった。

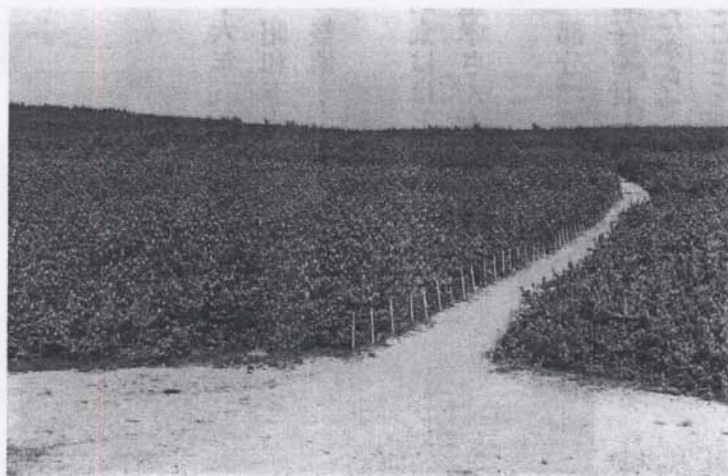
そして今何より気がかりなのは、マツクイムシ被害が拡がることだ。市民が本気でかからないと防げないのでないかと心配でならない。早期発見、防除に具体的に参加する手立てを、市民の知恵をしばって見つけていきたいと願う。

取材に協力下さった皆様、資料を提供下さった皆様、発行にあたり助言、協力下さった皆様に心から感謝申し上げます。

故人となられた方々のご冥福をお祈り致します。

一九九九年十月

浅
野
ミ
ヤ



●引用文献

「風の松原だより」第二号（一九九一年発行・風の松原を育てる市民の会）

「秋田縣海岸砂防造林史」（一九三三年発行・秋田県林務課）

「日本海北部沿岸地方における砂防造林」（一九三七年発行、一九六四年再刊・富樫兼治郎・財団法人林曹会）

「大正昭和林業逸史・上巻」（一九七一年発行・林業経済研究所編）より『砂防と親しむ二十年』

「絆」九号（一九八六年発行・能代勤労者文学会）より『能代の砂防林と私』

「北羽新報」一九九六、一、二四付けより『耐乏ひたすら続く日の一身辺』

「能代市砂防林の歴史」（昭和六十二年発行・鈴木重孝）

「月刊AKITA」平成六年四月号より『森林は叫ぶ―山と木と人の物語―』

「能代営林署管内後谷地国有林に於ける松穿孔虫の生態調査について」（一九五〇年・住友重久）

●掲載写真

五・三六ページは長岐喜代次（秋田市）さんからお借りしました。

他は三三ページを除いてすべて故鈴木重孝さんの遺されたものです。

浅 野 ミ ヤ

- 1944年 能代市西通町（旧、本町）に生まれる。
- 現住所 能代市鰺渕字鰺渕60番地
☎・FAX 0185-58-2360
- 「秋田のこだま」サークル・能代おやこ劇場・読書サークル「茱萸」（ぐみ）所属。

「秋田のこだま」叢書 - 2 -

私たちの風の松原物語

——語りつぐ能代海岸砂防林の近代——

発行 1999年11月15日

016-01¹⁷⁶⁻⁴能代市鰺渕一本柳¹²²⁻²

畠山正治方「秋田のこだま」編集部

☎0185-58-4969

非 売 品

表紙 ■題 字／三 戸 み つ
■レイアウト／今 井 詠 子



「秋田のこだま」叢書（2）